



TITLE:

<大會抄録>景穆太子と崔浩：北魏
太武帝による廢佛前後の政局をめぐって

AUTHOR(S):

川本, 芳昭

CITATION:

川本, 芳昭. <大會抄録>景穆太子と崔浩：北魏太武帝による廢佛前後の政局をめぐって. 東洋史研究 1995, 54(3): 557-558

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154531>

RIGHT:

唐代遞送システムの構造とその運用

— 河西道を中心にして —

荒川正晴

唐の公用交通は、驛を遞送據點として機能する交通網と、縣を遞送據點として廣がるそれとの二重的な構造を有していた。前者では、免課の色役である驛長・驛丁が各驛に配され、驛道に限定されたその交通機能を交えたのに對して、後者では、基本的に縣を單位に傳馬（傳送馬）が配備され、雜徭で徵發された馬夫がその飼養や縣道間の引導に當たっていた。いずれも縣で徵發された丁夫によって運用されており、交通機能の面においても、兩者は補充的關係を保つものであった。唐以前に遡ってパースペクティブに見れば、漢代に既に認められる驛制および縣を據點に機能する傳制との關連を考へる必要があろう。

ところが、八世紀以降、律令制支配の破綻が顯現化し、また公用交通・輸送の規模も擴大してゆくと、それまでの遞送體制をそのまま維持することは困難となった。驛制や傳制の弛廢が次第に表面化する一方、民間からの交通手段の雇傭が進展したことがうかがえる。こうした律令制下に構築された驛傳體制の機能が著しく低下してゆく状況のもと、新たな體制による公用交通網の維持が圖られた。なかでも、肥大化してゆく唐の財政・軍事を支えた重要な輸送路線については、開元時代に轉運使などが任じられ、そのもとで個別的な遞送體制が形成されていった。河西および中央アジアへの軍

物輸送を支えた河西道の長行轉運體制は、そのひとつであり、多くが八世紀に屬すトゥルファン出土の交通關係文書は、實に當該體制の具體的な運用を明らかにする史料となるのである。

景穆太子と崔浩

— 北魏太武帝による廢佛前後の政局をめぐって —

川本芳昭

太武帝時代の廢佛は、言うまでもなく太武帝、崔浩、及び寇謙之の三者を中心として斷行されたものである。一方、これに反對する勢力の核にいたのは景穆太子拓跋晃であったが、この當時の政局の中心にあって政治を動かしていた四者は、寇謙之が太平眞君九年に卒したのに始まって、太武帝の崩御した正平二年までの四年の間に相次いで死去している。景穆太子を除いた三者の死に關する事柄は、當時の史書に相當明確に記述されているが、これに對し景穆太子の死に關する史書の記述には表現上の搖れが見られる。本報告ではまずそこに太武帝と景穆太子との間の深刻な對立が影響していたことを明らかにする。次いでその對立が如何なる原因によって生じたのかという點を華北統一後の北魏内部の路線鬭争との關連で考察し、北魏の場合、胡漢對立の存在のため他の時代に比べとりわけ求められた帝權確立・強化の問題がそこに絡んでいることを指摘する。また、太武帝は胡族と一體感を抱きつつ、漢化への施策をも採用するという矛盾した面を合わせもつ皇帝であるが、彼のこの矛

盾した内實は胡漢對立の上に立つ至高な存在としての皇帝の追求という點で統合されていたことを指摘する。さらに崔浩事件の主因を考える際にもこうした帝權の性格を考えることが必要なことを論じ、そこに至る足掛かりとして事件の主因を民族間の矛盾に求める從來の定説では十全なる解答をなしえない疑問點を提示し考察する。

一四世紀イランにおける統治者の權威

——ムザッファル朝の場合——

岩 武 昭 男

イルハン、アブーサイード歿（一三三五年）後の混亂期に、イランの中南部を支配したムザッファル朝に關しては、これまで、ペルシア文學史において詩人ハーフィズとの關連か、もしくはイルハン朝史、ティムール朝史の前後の餘録としてのみとりあげられてきた。しかし、前者の見方に關しては、不十分な研究に基づく概説に過ぎず、後者の視點に關しては、イルハン朝のモンゴル支配とサファヴィー朝の成立を短絡的に結び付け、この時代を全般的に無視する傾向が強かったためであつた。

イルハン政權のアラブ系アミールの子ムバーリズディーン・ムハンマドが自立して成立したムザッファル朝政權は、イラン中南部の諸都市を順次掌握し、一時的ながらタブリーズをも制壓してイルハン後繼王朝のジャラーイル朝と拮抗する勢力に成長する。次代の

シャー・シュジャールの時代には、その權力がより確實なものとなる。兄弟間の對立が絶え間なかったものの、ティムール到來前のイランにおける最大勢力となつていたといえる。

今回の報告では、アッバース朝カリフへのバイア（臣從の誓約）など、この王朝が二代に亘つて行つた、イスラム政權として自らを權威づける政策を整理し、一四世紀イランにおけるイスラムと政權のかかわりに關し、近年研究の進みつつあるスーフィズムの展開とはまた異なつた展開を提示してみたい。

後期オスマン帝國の徵稅請負制に關する豫備的考察

永 田 雄 三

オスマン帝國史は、一六世紀末を境に前後二つの時期に分けられる。これまで一五・一六世紀の最盛期と一九世紀半ば以後の近代史とに研究が集中し、一七世紀から一九世紀半ばにいたる二五〇年ほどの時期はきわめて手薄であつた。しかし、近年この時期に關する諸問題が關心を集め、本格的な研究の進展が期待されている。社會經濟史分野では、とりわけ「チフトリキ」（「私的大土地所有」）の發生、發展、經營規模、農産物の市場化、そして、これらを經濟基盤として各地に勃興した地方名士（アーヤーン）層の動向などが注目されている。報告者もこれまでアーヤーン研究をそのチフトリキ經營を中心に進めてきたが、本報告では、アーヤーン層の權力基盤のいまひとつの焦點である徵稅請負（イルティザーム）を取り上